

を緩めてはなるまいと自戒しつつ、戦友と肩をたたき喜び合うのでした。

ナホトカで数日間、最後の民主教育を詰め込まれましたが、九月十九日、緑滴る祖国日本、舞鶴に上陸しました。

森林伐採のコムソモリスク

京都府 松本 長四郎

内地から遠く離れた満州にも内地の戦況が耳に入り、風雲急を告げる切迫した状況の昭和二十年三月八日。当時、建設会社に就職していた籠江省白城子で現役入隊した。部隊は鞍山高射機関砲隊であった。入隊翌日から激しい教練が行われた。八月に入って北朝鮮の輪城北方の魚遊洞というところの整備についていた。八月十五日、アメリカの飛行機一機がピラを播いて行った。そのピラによると、日本は連合軍に無条件降伏したと言う。日本は負けたと言うのだ。思いもか

けぬ事態だ。諸天に護られている神国日本が戦争に負けるなど思いもよらぬこと、茫然自失、我々兵隊は捕虜として一生苦役に従事するのか、内地の男性は皆アメリカに連行されるのか、不安な気持ちを語り合った。上官から「冷静に状況を見定めて、軽卒妄動をしないよう」と指令が出た。

二、三日は何事もなかったが警備していた。山を下り小銃の菊の紋を消せと命令が出た八月二十日頃、ソ連兵が初めてやって来て、所持品の検査をして兵器一切引き上げて行った。我々は武装解除されたのだ、どうなるのか不安は日々深くなるばかりだ。

北朝鮮の満州との国境近くの古茂山というところへ連れて行かれた。我々はいつの間にかソ連の指揮下に入れられ、ソ連兵のマンドリン（自動小銃）で拘束されていたのである。作業命令が出て、最初の作業は、終戦で大混乱している清津港の整備や羅津港での兵員輸送用の二段ベッド作りなど、方々の作業に引つ張り回された。その時宿舎が火事に遭い、持ち物全部灰となくなってしまった。ソ連から毛布や衣類など支給された

のは有り難かった。

食事はトウモロコシやヒエなどをとろとろに煮た粥が飯盒の蓋に七分ほど支給されるが、時によって大豆ばかり一カ月間食わされたこともあった。いくらよく煮ても大豆ばかりでは腹痛の者や下痢患者が多く出たものである。

昭和二十一年九月、朝鮮からソ連へ入りウラジオオストツクの収容所へ入った。作業は港に水揚げされた鮭・鱒などの箱詰めだった。箱に詰めた魚をシベリア鉄道で西の方へ送るのである。東と西とを繋ぐ唯一の交通路である。魚の荷造りに毎日行っても、我々の食膳には魚は一度も出て来なかった。

昭和二十二年夏頃、コムソモリスクの収容所へ移動した。ここは炭坑の街で石炭採掘に入ることもあったが、大体は鉄道や道路の新設、補修であった。鉄道と言っても仮設程度で、高い所は削り、低い湿地帯は丸太を敷いてレールを敷設してゆくので、常に補修してないと石炭貨車が脱線転覆することもある。

我々唯一の楽しみめの食事は黒パン三〇〇グラムと雑

穀の粥は変わらず、常に空腹を抱えての作業に若い我々も痩せ細っていった。秋も過ぎ冬近くになっても衣料の配給はなく、夏の下着に現地人の作業服であった。空腹のあまり炊事場の裏に捨ててあった野菜を食って下痢、入院した者も出た。餓鬼道とはこんなことを言うのであろう。道に落ちている石ころも、何か食べ物ではないかと目を光らす毎日であった。

昭和二十二年冬から二十三年にかけて、同じコムソモリスクではあるが森林地帯の収容所へ移った。ここは半地下式の宿舎で、雪の朝などは雪をスコップで掻き分けて外へ出るような状況で、一晩で四〇〜五〇センチも積もったことがあった。それでも伐採に出かけた。これから切る木のまわりの雪を除けて二人曳きの場所作りをする。二人曳き鋸は呼吸が合わないとも木を切ることが出来ない。ある程度切れたところで斧で斜めに切り口を作る。この方向に倒すよう反対側から切ってゆく。このやり方が悪いと予定しない方向に倒れて、自分らだけでなく、あたりで働いている戦友を傷つけることになる。亭々と天に伸びる直径一メートル

ル以上のカラ松の大木が倒れるときは、風を呼び付近の木々の枝をへし折り、その轟音は凄まじいものであった。雪が積もって足元が悪く、防寒服で身体も重く、逃げ損なって枝に跳ねられ大怪我した戦友もいた。乏しい食料三〇〇グラムの黒パンや汁のような雑穀の粥で、一日空腹で身体が自由に動かないのが伐採で怪我をする最大の原因ではある。また、この材木を集積地へ運ぶのが大変であった。

昭和二十三年六月頃、ゲーペーウーの中尉の取調べを受けたことがあった。軍隊へ入るまでの職業とか、兵科、階級は何か、現在の収容所の生活はどうか、仲間の会話の内容などいろいろ質問された。隠すようなことでもないので感したことを率直に返事をしたものだった。何を調べたのか、何がねらいであったのかも判らないまま終わった。

昭和二十三年から二十四年は、コムソモリスクより北の方のソフガワニというやはり森林地帯で伐採をやらされた。仕事に慣れてきて気分的に楽な感じであるが、朝晩の粥が少し濃くなった程度で、黒パンは三〇

〇グラムより大きくならなかった。ソ連は機械力が少なく、独ソ戦のせいもあつただろうが、人力不足のためか、人跡未踏と思われる大森林がどこまでもどこまでも続いているのには驚いたものである。

昭和二十四年六月中旬、毎年春になると真実らしくダモイのデマが流れたもので、今年もそんな噂が広がっていた。ある朝突然に、荷物をまとめて汽車に乗れという命令が出た。行き先はナホトカだ。今度は間違いない、我々にも生命の春が来たのだ、身体が震える程嬉しさがこみ上げて来た。間もなくナホトカに到着した。各方面から集結して来るようで、どの顔も喜びをかみしめている顔だった。身体全体に喜びが湧き上がって来る感じであった。別の収容所に分かれていた戦友と出会った兵隊が、弾けるような喜びで肩を叩いて語り合っているグループもいた。この最終の収容所でも共産主義の教育が二週間ほど行われた。また奥地の伐採にでも送られたらもう身体がもたない。おとなしく教育を受けた。出発前には共産党万歳、スターリン大元帥閣下方歳を何遍も合唱した。

昭和二十四年頃に日本に帰った者は筋金入りの共産主義者とソ連側にも日本側にも思われていたようだが、そんなものではない。食べ物の恨みは恐ろしい。

六月三十日舞鶴港に近づき、緑の山々が近づき祖国日本の風にあたりると感激の涙がポロポロと流れてくるのであった。

石炭の町カオルチャンカ

京都府 中西 勲

昭和二十年七月、東満州の牡丹江省横道河子で工兵隊として陣地構築や国境警備に当たっていた。その時、北の方の国境地帯で道路整備や橋梁補強などに働いていた現地人の労働者が続々と南下して来て、吉林へ帰るのだと言っていた。皆それぞれ薄いふとんをクルクル巻いて背負っていた。ふとんの中に鍋ややかんなどを包み込んでいる。これを持って彼らはどこへでも旅に出るのである。

八月になると、詳しくは判らないが時々見る新聞では、日本各地の都会がアメリカの爆撃機に空襲され大被害を受けている。ひしひしと危機感が身に迫って来る。九日には、ソ連軍が突如として東北ソ満国境を戦車部隊を先頭にして突破して来たということだった。関東軍の兵力百万と言われていたが、決戦に備えて沖繩へ移動していたので新たな兵力で防備されていた。ソ連の大戦車隊の激しい攻撃に、我が軍は第二、第三の後方陣地に下がるより仕方がなかったようだ。

八月十五日、重大放送があるというのでラジオを囲んで天皇陛下のポツダム宣言受諾の「終戦の詔書」を聞いた。日本軍はアメリカなどの連合軍に降伏したのだ。兵隊の我々はどうなるのか、捕虜になるのか、民間人となって帰郷出来るのか。数日は茫然としていた。

八月十七日、武装解除。我々が集めておいた小銃、機関銃などを持って行ってしまった。そのとき牡丹江の奥から開拓団の人々が何万人も、何日も何日も歩き続けているということ、吉林、新京（現在の長春）